国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成26年2月1日発行　第38巻第2号通巻第437号

月刊みんぱく

2014 2月号

特集
イメージの力

イメージの力をさぐる　吉田憲司
人類学とアート　小泉潤二
アートディレクターが見た
みんぱく資料　原田祐馬
「イメージ」雑感　長屋光枝

ミュージアムと建築

青木 保

東京六本木にある国立新美術館に勤めるようになって二年になるが、建築と美術館の関係について考えるようになった。奇しくも二〇一四年の二月から「イメージの力」と題する国立民族学博物館（民博）のコレクション展覧会をこの美術館で開催することになっている。奇しくも、と書いたのは両館とも日本を代表する建築家、故黒川紀章氏の設計になるものだからである。

「民博」は二〇一四年に創設四〇周年を迎えるということであるが、新美術館のほうは開館が二〇〇七年である。私はこの美術館がすっかり気に入っており、六本木という地の利もあるが、建物がすばらしい。正面の入口から入ると四階に吹き抜ける広々とした空間の開放的な感覚がいつも何か私に生気を与えてくれる気がする。ガラス張りの湾曲した壁面も美術館としては珍しくしかも斬新である。美術館は美術を鑑賞する場には違いないが、同時に来館する人たちに憩いのひとときを味わってもらう場とならなくてはならないとは、かねてからの私の主張であるが、一階のカフェを始め三階にあるポール・ボキューズのフレンチ・レストランも加えて四つのカフェ・レストランがある。と、思わず宣伝になってしまったが、まだの人は一度来て下さい。カフェの利用だけでも結構です。

実は美術館と建築の関係はいま新しい時代を迎えている。建築家の隈研吾氏によると、それは「ビルバオ現象」というらしいが、二〇世紀の終わりごろにスペインのバスク地方の古都ビルバオが文化都市として生まれ変わろうと、ニューヨークのグッゲンハイム美術館の分館を誘致したとき、アメリカの建築家、フランク・ゲーリーが設計を担当した。この建築が大評判となり、これを見るために多数の観光客が押し寄せるようになり、文化都市ビルバオの名前を世界に一躍轟かせた。これ以後、新しい美術館を建てる場合、世界的に名のある建築家に依頼することが流行となり、ランスのルーブルの分館は金沢21世紀美術館で名を馳せた、わが妹島・西沢両氏が担当したし、隈氏をはじめ日本の建築家も多忙を極めることとなった。また古典的には上野にある国立西洋美術館はル・コルビュジエの作になるもので、いまフランス政府が中心となって彼の他の作品とともに世界文化遺産に登録を申請中である。

私も一〇年以上も前ビルバオ・グッゲンハイムのうわさを聞いて一度訪ねてみたいと思ってきたが、二〇一二年五月にそれが実現した。建物はすでに写真などで見慣れてはいたが、整然としたヨーロッパの古都に突然未来が出現したような、その偉容（異様、威容）には感銘を受けた。美術館の入口の前のカフェでのひと時も忘れがたい。故黒川氏の手になる美術館と博物館の連携が日本の新しい美と知の創造と発展の幕開けになれば、と願うものである。

プロフィール
1938年東京生まれ。国立新美術館館長。1965年以来、タイを中心にアジア各地で研究調査。1972年から73年にかけてバンコクのタイ仏教寺院で僧修行をする。大阪大学、東京大学、政策研究大学院大学などで文化人類学の教鞭をとる。2012年1月から現職。近著に『文化力」の時代――21世紀のアジアと日本』（岩波書店）、『作家は移動する』（新書館）、『文化の翻訳』（東京大学出版会、新装版）など。

月刊 みんぱく
2月号目次

1 エッセイ　千字文
ミュージアムと建築
青木 保

2 特集
イメージの力
2 イメージの力をさぐる
吉田 憲司
4 人類学とアート――作品の力はどこにあるのか
小泉 潤二
6 アートディレクターが見たみんぱく資料
原田 祐馬
8 「イメージ」雑感――美術史学の立場から
長屋 光枝

10 似たモノさがし
愛の表現
八杉 佳穂
12 みんぱく Information

14 地球ミュージアム紀行
翻弄される博物館
飯田 卓
16 多文化をあきなう
カカオ生産者が「勝ち取る」フェアトレードへ
吉野 慶一
18 フィールドで考える・退官寄稿
思い込みの転換と導いてくれる人びと
小林 繁樹
20 人間学のキーワード
統治性
箱田 徹
21 異聞逸聞
表現手段としてのラッピング車両
金田 純平
22 制服の世界、世界の制服
「季節の踊り」の盛装と織り手
伊藤 敦規
24 次号予告・編集後記

特集

イメージの力

イメージの創造と享受のあり方に、人類共通の普遍性はあるのか。
この問いをテーマに掲げ、みんぱくが所蔵する膨大な資料を展示する「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」が、二月より国立新美術館で、九月からはみんぱくで開催される。
美術史学と人類学、あるいは美術館と博物館、西洋と非西洋、自己と他者などの壁を乗り越え、われわれ人類の生み出すイメージの多様性と共通性を発見しよう。

右｜舞踊劇チャムの仮面
地域：ティンプー　国名：ブータン
1991年収集　標本番号 H0180082
中｜アサフォ結社の軍旗　民族：ファンティ　国名：ガーナ
1995年収集　標本番号 H0197389
左｜女性用前掛け布　民族：クバ　国名：コンゴ民主共和国
1983年収集　標本番号 H0116530

イメージの力をさぐる

吉田憲司（よしだ けんじ）
民博 文化資源研究センター

イメージのはたらきの普遍性

人類は、その歴史のなかで、極めて多様なイメージを生み出してきた。しかもそのイメージは、単に人が見るもの、あるいは人に見られる対象としてそこにあるのではない。神仏の像や仮面舞踊と人間とのかかわりを想起すればよい。人間は、むしろ、自らが作り出したそのイメージとかかわることで、世界を改変するものとして操作し、あるいは享受してきたのである。

はたして、イメージの創造や享受のありかたに人類に共通の普遍性があるのだろうか。この問いは、極めて人類学的な課題といってよいが、じつのところ、人類学の側からはこれまで試みられたことのないものである。人類学の分野では、とくに二〇世紀に入って以降、文化相対主義への過度のこだわりから、普遍的な美の基準や普遍的なイメージの創造・享受のあり方について正面から問うことは、久しく避けてとおれてきた感がある。しかし、イメージのはたらきの普遍性を問うことは、そのイメージを介した文化を超えた相互理解の可能性を考えるうえで、極めて重要な課題であろう。

ふたつのミュージアムの協働

国立民族学博物館は、一九七四年の創設以来、世界各地の諸民族の文化の研究を進めるとともに、世界各地の人びとが生み出した生活用具や造形を収集・展示してきた。現在のそれらの資料の総点数は約三四万点におよぶ。そのコレクションは、世界の人びとが生み出したイメージの宝庫といってよい。

一方、国立新美術館は、コレクションをもたず、多彩な美術に関する展示・情報発信の施設として二〇〇七年に開館した。その六本木という立地を生かし、開館から三年目、二〇一〇年九月には、入場者数一〇〇〇万人を達成している。その企画力・構想力と情報発信力の高さは国内でも群を抜いている。

今回の展覧会「イメージの力」は、この国立新美術館と国立民族学博物館の協働の試みとして、国立民族学博物館のコレクションのなかから世界各地の造形を精選し、人類の生み出したイメージの喚起する感覚や効果、すなわちイメージのはたらきや享受のありかたに普遍性があるか否かを観客とともに体験的に検証してみようというものである。それは、言いかえれば、イメージのもつ「力」を評定しようという試みである。「イメージの力」展は、二〇一四年二月から六月まで国立新美術館で開催され、九月から一二月までは、民博の特別展示館で公開する予定である。

イメージとの出会い

展示場に並ぶ数かずの造形からは、目に見えぬ世界を人間がどのように可視化してきたのか、色とかたちに工夫を凝らすことで、どのような効果を生み出すことが目指されたのかを確認することができる。また、外部の世界との接触により、あらたなイメージが生み出されていく軌跡をたどることもできる。さらには、作り手が楽しみながらイメージを作り出していることが、視る者にも実感される例にも出会えるだろう。それらの出会いを通じて、イメージの創造や享受のありかたに人類に共通の普遍性がどれほどあるのか、その答えを展示を見ていただく方、お一人お一人の手で探っていただきたい。

国立新美術館外観

神像つきの椅子「カワ・トゥギトゥ」
民族：イアトムル　国名：パプアニューギニア
1988年収集　標本番号 H0164883

国立民族学博物館創設40周年記念
日本文化人類学会50周年記念

イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる

東京｜国立新美術館
会期　2014年2月19日（水）－6月9日（月）

大阪｜国立民族学博物館
会期　2014年9月11日（木）－12月9日（火）

人類学とアート
――作品の力はどこにあるのか

小泉（こいずみ）潤（じゅんじ）二　日本文化人類学会会長

あいまいさの二乗

「人類学」という概念あるいは研究分野には大きなあいまいさがある。人類学とは何かと聞かれて、紋切型の、あるいは回りくどい説明を越えて答えを示すのは難しい。「アート」ということば、概念あるいは分野もさらにあいまいである。アートとは、また美術や芸術とは何なのか。やはり紋切型の答えやよく知られた定義はあるにしても、アートの企てがさまざまに発散し枠を破壊しようとするとき、あいまいさが増幅されている。双方ともあいまいなふたつの概念を掛け合わせればあいまいさの二乗になる――ように思えるが、今回、日本文化人類学会五〇周年記念事業の一環として、国立民族学博物館と国立新美術館との協力のもとに準備した展示を結果としてみれば、人類学とアートのそれぞれがかえって明確になったように思う。

つくられたかたちの力

「美しい」「綺麗（きれい）な」「力強い」「凄（すご）い」、ときには「気味が悪い」といった陳腐な表現によってはとらえきれない、ことばで分節化できないもの、ことばで分節される以前の何ものかが、一旦かたちをつくってそこにある。そして、世界のあらゆる場所と状況のなかでそれぞれの営みを続けている名前のない、ときには歴史もない（とされる）人たちがそれをつくっている。つくった人たちはアートや芸術を目指しているのではなく、自ら作者としてその作品に署名することもまずない。美の創造を企図するのでもなく、それを売ることに頓着するのでもない。それでもその人たちの手によりつくられたものは、強力である。

ものの側とひとの側

構成された素材、またそこに生まれたある種の秩序が、なぜか視る人に何かを感じさせる力をもつようになる。そのような力が、そこにある木や布、石や金属や顔料がそれぞれ示す形式や論理や構築のされ方、つまりある種の「構造」によっていることは否定しにくい。そこにある「もの」の側には確かに力があり、それは材料や色、直線や曲線、面や図形などがいかに構成されるかに結局は依存している。この点を強調していけば、構造主義的なアート論にもなる。

一方そのような力は、そうした「もの」の論理や構造ではなく、それを視る（聞く、触る、読む）「ひと」の側に生じるという事実がある。かたちのなかに力が内在するのではなく、かたちのもつ力はそれを視る人の側に生まれる。もし人がそこにいなければ、それがどんなかたちをしていても、ただの木や石である。

食事や睡眠のほかはひたすら布をつくる。グアテマラ北西部マヤの女性

同じ力なのか

だとすれば、そこに人さえいれば、そこに生まれた（と感じられる）力は同じなのか、それともそこにいる人がどのような人であるかによってその力は違ってくるのか、という問題になる。アフリカの彫刻をつくった手や目や感受性をもつ人びと自身がそれを視ている場合と、「アート」にとくに関心をもってきた欧米や、日本やアジアやオセアニアに生まれた人びと（あるいはそこを横断して動く人びと）がそれを視ている場合に同じことが起こり同じものが見え同じ力が生まれているのか、それとも違うのか、ということになる。「アフリカの彫刻を荒野のピカソとして眺め、ジャワのガムラン音楽を騒々しいドビュッシーとして聴いている」という議論である。

これは、そもそもわたしたちが人であることによることと、わたしたちがそれぞれの場や世界――日本や韓国や中国、欧米やアフリカ、オセアニアやラテンアメリカ――に生きる人であることによることとの対比であり、人類学の中核のすぐ近くにある問題である。

右｜リチャード・ロング
“瀬戸内海の流木の円”（手前）
“瀬戸内海のエイヴォン川の泥の環”（奥）
写真・山本糾
1997年制作
ベネッセホールディングス蔵
アートは、絵の具や金属や木やガラスなど、コンテクストに中立的な素材で作られるとは限らない。コンテクストを強くもった「流木」という素材による造形の例。浜辺に打ち寄せられ、すてられた流木が美術館に運ばれ丸く並べられたとき、それは突然作品となり巨大な価値をもつ
中｜仮面「グバ・グバ」
民族：バウレ
国名：コートジボワール
1978年収集　国立民族学博物館蔵
標本番号 H0062896
左｜「ムラサキイガイ」
制作者：ボー・ディック
民族：クワクワカワクゥ
国名：カナダ　1986年制作
国立民族学博物館蔵
標本番号 H0144651

アートディレクターが見たみんぱく資料

選・コメント
原田祐馬（はらだ ゆうま）　UMA / design farm

「イメージの力」展図録を手がけるアートディレクター、原田祐馬氏。原田氏が、今回展示される資料を見て、感じたこと、思ったこと。

1979年大阪生まれ。京都精華大学芸術学部デザイン学科建築専攻を卒業後、インターメディウム研究所（IMI）終了。
アートディレクター／デザイナーとして、ブックデザイン、グラフィックデザイン、エキシビジョンデザインなどを手がける。
大阪に国際水準のデザインを生み出すべく、その状況を創出しようと取り組むイベント「DESIGNEAST」や、瀬戸内国際芸術祭2013「小豆島・醤の郷＋坂手港プロジェクト」のディレクターをつとめるなど、その活動はデザインの枠にとどまらない。

ユダ人形

民族：メスティソ
国名：メキシコ
1985年収集
標本番号 H0131670

白い身体に黒いライン、これを見て一番に思い浮かべたのは、成田亨（なりた とおる）がデザインをしたウルトラ怪獣・ダダ。手を挙げた姿もダダそのものだ。しかし、この人形はイエスを裏切ったユダを張り子人形にしたもの。復活祭前日にメキシコでは悪の象徴として、首つりにされ、焼かれ、むち打たれ、花火をいれて爆破される。必死で逃げ惑いウルトラマンに殺されたダダと、ボロボロにされる無抵抗な人形、僕はどっちも愛おしい。

鹿頭（ししがしら）

地域：岩手県
国名：日本
1984年収集
標本番号 H0122389

雪景色のなかに、この装束を着た人がすっと立っているのを想像した。首が長くみえるような模様は、まるで骨が見えているようで恐ろしくも感じる。聞くところによると実際は5人以上が一組みとなり、歌って踊るらしいが、丁度手を広げたくらいの角の幅が、隣との距離をつくっているのかもしれない。東北に暮らす人たちが、鹿をどのように見て、どのように接していたのかが理解できるデザインは秀逸。

棺桶（ライオン）

このライオン、棺桶（かんおけ）らしい。確かになかに入れるようになっている。ガーナでは亡くなると故人が好きだったものや、想いがあるものが棺桶になる。僕だったら何に入りたいかと考えていたところ、じつは、自分では決めることはないらしい。家族が故人のためにどのような棺桶が相応しいのか考え、工房に制作を依頼する。美しさというよりもこの不格好さが故人を想い、みんなが一緒に笑えるのだろう。好きだったものを棺桶に入れるよりもとってもストレートな方法で、僕は好きだ。

制作者：バー・ジョー
地域：テシ
国名：ガーナ
2003年制作
標本番号 H0231430

生命の樹

民族：メスティソ
国名：メキシコ
1987年収集
標本番号 H0153925

毒々しい色彩に「生命の樹」という名称を聞いて、一番に思い出すのは岡本太郎が制作した「太陽の塔」内部にある41メートルの「生命の樹」だった。じつはこちらの「生命の樹」は、ユダ人形にも出てきた成田亨のデザインによるもの。メキシコとキリスト教と成田亨、不思議な縁が見えてくる。メキシコの「生命の樹」は民芸品であり贈り物でもあることから、とっても幸福が満ちあふれているが、僕は、これが41メートルになったものを想像してワクワクしているのだ。

床屋用看板

青空床屋の看板というのも素敵だが、人の顔がしっかりと浮き立つ不思議な色彩感覚と全体に目がいってしまうバランスの良い構図が素晴らしい。ヘアスタイルに名称があり、4人の顔の特長がしっかりと出ている。ガーナにおけるSMAPのような有名グループなのだろうか。NICE GUYのみ正面を向いていることもあり、一番人気だということが伺える。それにしても、床屋の主人、顔が真っ青なことから儲（もう）かっていない様子。僕は、心配である。

民族：ガ
国名：ガーナ
1996年収集
標本番号 H0205090

「イメージ」雑感
――美術史学の立場から

長屋光枝（ながやみつえ）　国立新美術館主任研究員

人間と想像力とのあいだに

人間の想像力は、造形活動を支える根本的な力であり、生み出されたイメージは、翻って観者の想像力を刺激する。本展覧会は、人間とイメージのあいだの相互作用をテーマにしている。「イメージの力」とは、こうした主旨に相応しい展覧会タイトルだと自負しているが、正式名称として決定されるまでには、少なからず紆余曲折があった。このことばから、イメージ・トレーニングや、はてはスピリチュアル・ブームに乗った自己啓発プログラム等が喚起されるという反対意見が出されたのである。この危惧は、美術史を学んだわたしには思いがけないものであるのと同時に、展覧会の目的を意外な方向から照らし出していて興味深くも感じた。

逆転するイメージ

西洋美術史の文脈で用いられる「イメージ」は、狭義には、模倣（ミメーシス）という概念と結びついている。このことは、イメージの訳語である「像」を引き合いに出すとわかりやすい。たとえば、仏像が仏の像であり、肖像画が特定の人物の像であるように、イメージとは、実在する対象や概念があって初めて存在可能な、いわば写しである。色やかたちを駆使して実現されたイメージは、オリジナルの模倣あるいは具現化なのである。一方、わたしたちは、現実には無い何かをありありと思い浮かべる行為を「イメージする」などと表現するし、程度の問題はあるにせよ、イメージに現実を変える力があることを経験的に知っている。この文脈での「イメージ」は、現実を必要としないばかりではなく、現実を凌駕するという点で、オリジナルの写しとしてのイメージとはまったく逆のベクトルをもつ。

イメージを写しととらえる見方が強い西洋美術でも、現実とイメージの関係を逆転させる力は認識されていた。実際に、これを象徴的に表した物語「ピュグマリオン伝説」は、しばしば絵画の主題となっている。ピュグマリオンという伝説上の人物が、自らが作った彫像に恋をし、その像のように美しい女性と結婚したいと祈る。その結果、彫像に生命が与えられたというこの伝説は、イメージの生成に現実が必要とされないこと、イメージが現実を超える力をもつこと、イメージが人間と身体的にかかわりうること、などを示唆している。絵画や彫刻などの視覚芸術が、ヨーロッパにおいて模倣の技術として低く位置づけられたことには、イメージの魔術的な力への怖れも反映していたことだろう。

展示物との距離

さて、美術館と博物館では、イメージに対するスタンスに大きな違いがある。わたしにとって印象的だったのは、博物館では触ることができる展示物が珍しくないことである。美術館は、展示物に触ることを基本的に禁じている。イメージは、距離をもって眺められるものとして特化されてきたのだ。このことは、美術館という制度が、イメージを模倣と結びつけてきた西洋で整えられたことを少なからず反映しているだろう。残念ながら、東京展でも展示品に触れることはできないのだが、イメージとの相互作用を体感していただくことを目指すこの展覧会で、美術館のあらたな可能性が開けばと願っている。

右上｜オノレ・ドーミエ
≪『古代史』：(47) ピュグマリオン「うひゃあ、芸術の輝ける大勝利！　驚いたのなんのって／大彫刻家もびっくり仰天、自分でつくった彫像が息づき／みずみずしくも甘ったれた風情で、のそのそ腰かがめ、ねえ、ちょっと／あたしにもひとつまみちょうだいな、なんて目顔で言ってくれたひにゃ」（シメオン伯爵）≫
1842年制作　リトグラフ、国立西洋美術館蔵
左上｜ナマハゲの面（赤鬼）
地域：秋田県男鹿半島入道崎　国名：日本
1984年収集　国立民族学博物館蔵
標本番号 H0122399
左下｜呪術用の像「ミンキシ」
民族：ヨンベ　国名：コンゴ共和国
1976年収集　国立民族学博物館蔵
標本番号 H0007519

似たモノさがし

似てるけどどこか違う
似てないようでどこか似てる
いろんな工夫や思いを映す
みんぱくの所蔵資料

愛の表現

八杉 佳穂（やすぎ よしほ） 民博 民族文化研究部

二月一四日は、ご承知のように、ヴァレンタインデーである。愛の告白の日に、いまではチョコレートを女性から男性に贈る習慣がすっかり定着しているが、それはチョコレート会社の販売戦略だったという。それにしてもチョコレートが好まれているのは、含まれるテオブロミンの効果で何となくやさしい気持になるからであろうし、ポリフェノールやミネラルなどが豊富で健康にもいいからであろう。愛の証として何かをプレゼントするのは、世界中どこにでもある人間の営みのひとつであろうが、じつにふさわしいものが選ばれたものである。最近は義理チョコや友チョコといって、チョコレートをプレゼントすることがはやっているようだが、たとえ義理チョコでも、ミャオ族の絵画のように、自然と笑顔になること請け合いである❹。

愛する気持ちは互いに感じ合うものといっても、何かの形にしたくなるものである。愛の証にもっともふさわしいものは、婚約指輪であろうし、結婚指輪であろう。腕輪を贈るところもある。愛の告白のために女性の家に矢を打つこともあったという❶❺❻。

最近は、既製品を贈り物とすることが多くなったが、それでも、手袋やマフラー、セーターなどを自ら丹精込めて作って贈る女性も多いにちがいない。願い成就の願掛けやお守りをもつこともあろう❷。

わたしが贈り物としてもっとも感動したのは、恋人や夫、子どものために、何ヶ月もかけて織る衣服であった❽。いまでは少なくなったが、グアテマラの女性は二〇年ほど前まで、村ごとに異なる衣装を身につけていた。いくつかの村では男性の衣装もあった。それらの衣装にみとれて、最初のころは、女性が腰機で何ヶ月もかけて織ることになかなか気づかなかった。それに気づいたとき、女性の細やかな仕事とともに、夫や子どもにかける愛情の深さをあらためて思い知った。日常の家事の空いた時間に織るそうした織物も現代化に伴いほとんどなくなった。愛の表現の形はどのように変わっていくのであろうか。

❶男性用首飾り、南アフリカ、
縦 16 × 横 7 cm、H0233087
中央に垂れ下がる四角のなかの柄は求愛のメッセージで、恋人に去られたときは足首に巻く

❷護符（符籍）「心をつかむ（恋愛）」、韓国、
縦 19.5 × 横 9cm、H0214184

❸ひょうたん笛、中国、
幅 13 × 奥 行 54 × 高 さ 13cm、H0237912
雲南省西南部の少数民族のあいだで、恋心を伝えるために用いられていた

❹農民画、中国、
縦 79 × 横 54cm、H0226509
苗族の恋愛歌を交わす場面が描かれている。右の人物がひょうたん笛を吹いている

❺愛の告白用 弓矢、ナミビア、
幅 4.7 × 奥 行 14cm（弓矢入れの寸法）、H0204332
かつてサンの人びとは、愛の告白のため女性の家に矢を打ったことから、矢 3 本、弓 1 本が袋に入ったセットがお土産用としてつくられている。男性から女性に贈る

❻婚約指輪、グアテマラ、
直径 2.2 × 高さ 1.1cm、H0153529

❼糸取り棒、エストニア、
幅 16 × 奥 行 37 × 高 さ 2.3cm、H0188229
きれいな装飾をみずからほどこした糸取り棒を婚約者に渡すことで、一人前の男と認められた

❽高地マヤの衣装（男性用、女性用）、
グアテマラ、H0065522 ほか

※寸法は計測時の最大値を示す。

展示場新構築のお知らせ
朝鮮半島の文化・中国地域の文化・日本の文化「沖縄のくらし・多みんぞくニホン」の展示場が3月20日にオープン！

国際シンポジウム
「ペルー南海岸における社会の実態と変容（Desarrollo y Cambio Social de las Sociedades Prehispánicas en la Costa Sur del Perú）」
ナスカおよびパルパ地区を中心に現地調査を実施しているアンデス考古学者が集まり、この地域に成立した諸社会（パラカス、ナスカ、イカなど）の実態とその動態に関する知見を深めるとともに、共有します。
日時　2月16日（日）10時～17時30分
会場　本館第4セミナー室
※申込不要、参加無料、スペイン語【通訳なし】
お問い合わせ先
関研究室　sekiken@idc.minpaku.ac.jp

国際シンポジウム
「個人・家族・国家のゆくえ――文化人類学と人口学からの学際的アプローチ」
今日のサブサハラ・アフリカ地域における個人と家族、国家が直面する課題を、国際人口移動や保健医療、ジェンダー、家族などのテーマから検討します。フランス国立パリ・デカルト大学の人口開発研究所と連携し、日仏の研究者と援助機関を交えた社会に向けた理論的考察を目指します。
日時　3月1日（土）10時～17時30分
　　3月2日（日）9時～16時30分
会場　本館第4セミナー室
※要事前申込、参加無料
　日本語・フランス語【同時通訳あり】
お申し込み・お問い合わせ先
三島研究室　mishima@idc.minpaku.ac.jp

人間文化研究機構第23回公開講演会・シンポジウム
「高齢期のウェルビーイングと多様な住まい方」
高齢期のウェルビーイングに配慮した多様な住空間構想が、すべての人にとって住み心地のよい、地域文化を活かしたコミュニティを育てゆく可能性と道筋について考えます。
日時　3月8日（土）13時～17時20分
会場　イイノホール
　　（東京都千代田区内幸町2－1－1）
※要事前申込、参加無料、手話通訳あり

公開講演会
「働き者と、ナマケモノ!?――『はたらきかた』文化論」
働き者はどこにいるのでしょうか。高度福祉国家フィンランドにおける事例、成果の不確実性がつねに大きいカツオ釣り漁業者の事例などから、「はたらきかた」を文化としてとりあげます。
日時　3月20日（木）18時30分～20時45分
会場　オーバルホール
　　（大阪市北区梅田3－4－5
　　毎日新聞社ビルB1）
※要事前申込、参加無料、参加証必要
お申し込み・お問い合わせ先
本館　研究協力係
電話　06・6878・8209

カツオの一本釣り

みんぱく映画会／みんぱくワールドシネマ
「人生はビギナーズ」
75歳にして同性愛者だとカミングアウトし、余生短い人生を思うままに生きる父と、自分自身に自信が持てない息子との交流を描いた作品を通して、これまでの家族形態における同性愛者の存在と人間関係、これからの新しい家族の在り方を皆さんとともに考えていきたいと思います。
日時　3月16日（日）13時30分～16時30分
　　（開場13時）
会場　本館講堂（定員450名）
※申込不要、参加無料
※当日10時から講堂入口にて整理券を配布

みんぱくミュージアムパートナーズ
「点字体験ワークショップ」
日時　2月8日（土）12時～15時30分
　　3月8日（土）12時～15時30分
会場　本館エントランスホール
※当日受付、参加無料

地球おはなし村
「おはなし、おはなし～西アフリカの昔話をかたる～」
日時　2月27日（木）11時15分～11時45分
　　3月16日（日）13時30分～14時
会場　本館エントランスホール
※当日受付、参加無料

■お知らせ
4月から、研究公演、みんぱく映画会、みんぱくワールドシネマにご参加いただく際、当館の観覧券のご提示をお願いすることといたしました。観覧券は、当館観覧券売場または自然文化園各ゲート脇の券売機等にてお買い求めください。
なお、みんぱくフリーパス、国立民族学博物館友の会会員証、キャンパスメンバーズの学生証等をお持ちの方は、ご提示いただくと、観覧券は不要です。

●展示場リニューアル工事のお知らせ
展示場リニューアル工事のため、朝鮮半島の文化・中国地域の文化・日本の文化（沖縄のくらし）が閉鎖されます。
期間　3月19日（水）まで

●展示場一部閉鎖のお知らせ
本館2階展示場の空調設備更新のため2月19日（水）まで、展示場の一部閉鎖をいたします。その間は観覧無料となります（ただし自然文化園（有料区域）を通行される場合は、入園料が必要です）。ご理解とご協力をお願いします。
閉鎖区域
オセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、西アジア、音楽の一部

※各イベントについてくわしくはホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時から17時（土日祝を除く）です。

国立民族学博物館創設40周年記念
日本文化人類学会50周年記念
「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」
迫りくる力、驚きとの出会い、このアートを体験しよう
会期　2月19日（水）～6月9日（月）
会場　国立新美術館　企画展示室2E（東京）

みんぱくゼミナール

会場　国立民族学博物館 講堂
時間　13時30分～15時（13時開場）
定員　450名（当日先着順）
参加費　無料（展示をご覧になる方は、2月20日（木）以降は観覧料が必要です）

第429回　2月15日（土）
ベトナムの黒タイのうた、おはなし
講師　樫永 真佐夫（国立民族学博物館 准教授）

ベトナム、イエンバイ省ギアロにある黒タイの村で

山がちなベトナム西北地方には、たくさんの民族が高度に応じてすみわけています。盆地ではそのうち黒タイという人びとが、水田をひらいてくらしています。かれらが村で伝えてきた歌やお話を紹介し、かれらが自分たちのくらしをどのようにイメージしているのか、村の現状にふれながらお話します。

第430回　3月15日（土）
装いのセンスと伝承――中国のフィールドから
講師　横山廣子（国立民族学博物館 准教授）

大理白族自治州のイ族（1990年撮影）

中国雲南省では、さまざまな民族衣装を目にします。日常的に着る人びとは減少していますが、民族衣装は大切にされています。変化しつつ伝承され、洗練されてきた装いのセンスが、色合い、形、装飾、そして何より着方にあらわれます。それを紹介し、伝承がどのようにおこなわれるのかも考えてみます。

友の会

国立民族学博物館友の会　電話 06-6877-8893（平日9時～17時）　FAX 06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/　　e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会（大阪）
会場　国立民族学博物館 第5セミナー室
定員　96名（当日先着順、会員証提示）

第429回　3月1日（土）14時～15時
梅棹忠夫のモンゴル調査をたどる
講師　小長谷有紀（国立民族学博物館 教授）

梅棹忠夫の民族学研究にとってモンゴル研究は格別な意味をもっています。現在、民博では残されたスケッチやフィールドノート、カードなどを整理し、梅棹アーカイブズとして公開する作業を進めています。私はこの作業の一環として2013年秋に張家口や渾善達克（ぐんしゃんだく）砂丘、蘇尼特（すにと）など梅棹ルートを走破しました。梅棹の克明な記録の数々を整理する楽しさ、そして梅棹ルートを実際に回った旅の途上での出来事などをお話しします。
今年の秋には、スケッチやノートを手に、友の会のみなさんとともに再度、内モンゴルを訪ねようと思っています。ぜひご一緒しましょう！（旅の詳細は「友の会」までお尋ねください）

第430回　4月5日（土）14時～15時
【新 中国地域の文化展示関連】
中国最多の少数民族、チワン（壮）族の現在
講師　塚田誠之（国立民族学博物館 教授）

東京講演会
会場　国立新美術館研修室A・B
定員　60名（要事前申込）

第108回　3月9日（日）13時半～14時15分
国立新美術館での「イメージの力」展開催にあたって
講師　須藤健一（国立民族学博物館 館長）

「イメージの力」展は本館所蔵の34万点の標本資料から「美的基準」にもとづいて600点を選りだしました。美術館の展示はアート、民族学博物館のものは民族資料と言われてきました。今回は民博コレクションを国立新美術館で披露する試みです。みなさん、世界各地の住人が創りだした多種多様な造形物のなかに「美しさ」や「アート」を発見する楽しみを味わってください。本講演は、「美の普遍性」に思いをめぐらすことにします。
※講演会終了後に、国立新美術館研究員による展示概要の解説（30分）もおこないます。

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ

電話 06-6876-3112
FAX 06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

世界のことばで「ありがとう」。

オリジナル商品の「ありがとうスタンプ」に新しいことばが登場し、第一弾のマダガスカル語とあわせて全8種類となりました。
今回のデザインは、武庫川女子大学の生活環境学部情報メディア学科の学生さんによるもの。若い人たちの感性を商品に活かしたいという私たちの思いと、「アイデア」から「商品化」への実際の道のりを学生たちに学ばせたいという肥後有紀子先生の思いが重なって、今回のコラボレーションが実現しました。
世界のことばで「ありがとう」はどのように言うのか、どのような文字で書かれるのか、楽しみながら学びましょう。今後もインドネシア語など、続々登場の予定です。

ありがとうスタンプ　各420円
※括弧内は各文字の読み方を表します。
価格はすべて税込

地球ミュージアム紀行

翻弄される博物館

博物館の運営には人とお金とがどうしても必要になる。とりわけ公的な博物館には、行政のサポートが欠かせない。必然的に博物館は施政者の思惑に揺れ動くことになる。市民、施政者、博物館の三者の関係は博物館の課題のトレンドにさえなっている。

飯田卓（いいだ たく）
民博 先端人類科学研究部

みんぱくが位置する大阪府では、五年ほど前、府政合理化の流れのなかで博物館をはじめとする多くの文化施設が廃止された。みんぱくは国立機関なので影響がなかったが、予算は削られつづけている。文化施設は、かくも政治に翻弄されやすい。

民族の相互理解のために

今回紹介したいのは、大阪の博物館でも日本のでもない。まずは写真を見ていただこう。これは、マダガスカルの地方都市トゥリアラにある、大学付属博物館の展示である。この博物館は、マダガスカル口承記録研究センターという大学の研究機関が運営している。「博物館を併設した研究所」という意味では、みんぱくと同じといってよい。

ちがうのは、みんぱくが国立でありながら世界じゅうの文化を紹介しているのに対して、同じく国立のトゥリアラ大学付属博物館は、逆にマダガスカルの一地域だけを扱っている点だ。後者が扱うトゥリアラ州という地域は、国の一部にすぎないが、さまざまな風土と社会環境のもとにさまざまなくらしが営まれている。そして、とくに村落部では、くらしの多様さの理由が民族のちがいに求められる傾向が強い。マダガスカルの博物館は、こうした国内や地域内の多様性を出発点としながら、文化的背景を異にする人たちの相互理解を支援するよう期待されているのだ。

写真に写っている彫像は、アルアルという墓標の先端にほどこされた装飾である。こうした装飾は、マハファリ人のあいだでさかんに製作されている。かつては、別のある民族集団でも墓標の装飾が一般的だったが、詳しくみるとアルアルの様式とは異なる。アルアルは、マハファリ人の民族的シンボルとなりつつある。

地方色が強いという点だけならば、日本でも類似の展示を地方博物館でみかける。しかしそれは、どちらかというと過去のくらしを展示したもので、その地域が歩んできた歴史を示すことに強い関心がある。トゥリアラ大学付属博物館の場合はそうではなく、身近な他者の現在を理解する意図のもとに、結果として展示に地方色があらわれている。このことは、多文化状況に置かれた国に共通だろうが、アフリカ大陸などでとくに強く感じる点である。

国政と博物館

ここまでに書いたことも、博物館と国政との関係をよくあらわしている。文化状況をふまえながら、博物館によって多文化の共存や価値観の統一をはかることは、まさしく国政の課題だからだ。しかし、マダガスカルの博物館にとってもっとも大きな問題は、別にある。国政が、博物館に運営資金をじゅうぶん注いでいないのだ。

最初の写真をもう一度見ていただきたい。背景に、タイプライターかワープロで印字したA4の紙がみえる。印字した紙をそのまま壁に貼りつけて、展示解説としているのだ。パネルにプリントした写真もあるが、白黒であるために、遠い過去のような印象を受ける。このパネルが製作されたころ（おそらく一九七〇年代）には、白黒写真もほぼほぼにリアルな表現手段だったのだろう。しかしデジタル写真が普及した現在では、マダガスカルの人びとでも、こうした写真の内容を過去のものと受けとるようになっている。

古い表現手段を更新できずに長らく放置し、あたらしい展示解説が必要になるとオフィス機器で簡易に作るというのが、マダガスカルの国立博物館の現状だ。それは、展示内容の良し悪しには関係ない。だが、博物館の置かれた状況がかくも端的にあらわれる例は、あえて紹介しておきたかった。

じつをいうと、運営資金をじゅうぶん与えられていなくとも、展示場を公開できる博物館はまだまだしである。マダガスカルでは、二〇〇九年に大統領が追放され、暫定政権が発足して以来、大学生によるデモが断続的に頻発している。大学によっては博物館を開くどころではないし、高等教育省直属で大学と関係ない博物館も、新装開館のタイミングを見はからって閉館したままだ。

マダガスカルでは二〇一三年の一〇月と一二月に大統領選挙がおこなわれ、正常化の道をたどりつつある。じっさいに国政が正常化するのはまだ時間がかかりそうだが、博物館の状況も一刻も早く改善してもらいたい。

トゥリアラ大学付属博物館のアルアル（撮影・荒川裕子　みんぱく友の会会員）

アルアルの彫像部分（みんぱくのアフリカ展示場で展示中）

墓地で用いられているアルアル

トゥリアラ大学付属博物館の展示

アンタナナリブ大学付属博物館収蔵庫での資料調査。この収蔵庫の保存管理には、日本人研究者も協力している

多文化をあきなう

カカオ生産者が「勝ち取る」フェアトレードへ

吉野慶一（よしの けいいち）
Dari K株式会社代表取締役・宇都宮大学客員准教授

フェアトレードといっても、その方法や仕組みは千差万別である。京都のチョコレート専門店Dari Kは、インドネシア、スラウェシ島のカカオ農家との直取引によりカカオ豆の品質の向上と、市場価格にとらわれないトレードをおこなっている。

チョコレートを食べたことがない

チョコレートの原料であるカカオがアフリカや中南米だけでなく、アジアのインドネシアでも採れると知ったのは二〇一〇年のこと。詳しく調べてみると、採れるどころかインドネシアは世界で第三位のカカオの一大産地だった。さらに、カカオ豆の価格は過去一〇年間でなんと約四倍にもなっていた。それなら、カカオ農家の所得も四倍に増えているのだろうか、そう思ったが現実はそう甘くはない。一万八〇〇〇以上の島々からなる世界最大の島嶼（とうしょ）国インドネシアにおいて、カカオ生産の約七割はスラウェシ島に集中する。このスラウェシ島最大の都市マカッサルからバスで北上すること一〇時間、カカオ栽培の盛んな村を訪れた。そこで驚くべき事実を知ることになる。カカオ農家は、カカオ豆が加工されチョコレートになることは知っているものの、チョコレートそのものを食べたことがなかったのだ。それだけではない。カカオの価格は遠く離れたロンドンやニューヨークの国際相場で決まる。つまり農家は自身で育てたカカオ豆の価格さえ自ら決められないのだった。

発酵への挑戦

「この状況を何とかできないだろうか」。当時金融業界でアナリストをしていたわたしは、毎日めまぐるしく動く株価を追う日々の連続だった。しかし、学生時代にバックパックで五〇カ国以上旅し、大学院では途上国経済の研究をした経験が、株価の分析でなく実体経済にかかわりたいという思いを強くした。しかし仕事をしながら片手間で世界の不条理な現実を変えることは到底できない。覚悟を決めて金融アナリストの仕事を辞し、インドネシアに再度渡った。そこでまず目をつけたのは「発酵」だ。カカオは収穫後に発酵することで香りが良くなる。この発酵の作業そのものは難しくない。バナナの葉などに包んでおくと、目に見えない微生物が自（おの）ずとカカオ豆を発酵させてくれる。論文を読み漁（あさ）ってえた知識を元に、村の農家を一軒ずつ回った。ところが、である。いくら発酵の重要性を説いても、「発酵をさせてみよう！」という農家があらわれない。考えてみれば無理もない。発酵させれば確かにチョコレートにしたときに香りも味も良くなるだろう。しかしチョコレートを口にしたこともなく、ましてや発酵させても価格の決定権がない農家にとって、発酵とは対価を伴わず単に面倒な作業に過ぎないのだ。

試行錯誤の日々

このままでは現実は変わらない。そう思ったわたしは、このとき会社設立の決心をした。カカオ産地のスラウェシ島はアルファベットの「K」の形をしている。インドネシア語で「～から」を意味する「Dari」を前につけて、「Dari K」（スラウェシ島から）という社名にした。寄付や補助金に頼らず、自分で利益を上げ再投資する株式会社としての挑戦。まずは自社でカカオ豆を買い取ることにした。「しっかり発酵したカカオ豆なら、市場価格より高く買います」。わたしは再度農家を回り、一緒にカカオを発酵させては、その豆を買い取っていった。しかし買い取ったはいいが、わたしは元金融アナリスト。菓子職人ではない。発酵した高品質のカカオ豆はあってもチョコレートは作れない。とはいえ、ショコラティエとてカカオ豆からチョコレートを作ることはできない。通常、彼らの仕事は既製の製菓用チョコレートを溶かすところから始まるのだ！だったら自分でやるしかない。こうしてわたしとショコラティエのカカオ豆からチョコレートを作る試行錯誤の日々が始まった。

前代未聞のチョコレート誕生

それから数週間後、出来上がったチョコレートは奇跡的な味を見せた。前代未聞「自家焙煎」のフレッシュなチョコレートの誕生だ。既存のチョコレートとは比べ物にならない、カカオが香るチョコレートは口コミで広がった。高級ホテルや百貨店からも引き合いが来る。現在は京都で店舗販売や通販を手がけるが、今後はインドネシア現地でのチョコレート製造に着手する。生産者が自身でチョコレートを作って食べるようになったら、より質の良いカカオを作るモチベーションになるはずだ。それに、カカオを原料として販売するのではなく、自ら加工してチョコレートなどの商品にすれば、国際相場で価格が決められるカカオ豆とは違い、自らが価格決定権をえることができる。

フェアトレードというと、市場価格に上乗せした金額を生産者に払い、その上乗せによって「フェア」を達成する仕組みが多い。しかしDari Kは違う。発酵させて付加価値をつけることを生産者に教え、納得できる上質のものだけを高く買う。生産者が自ら学び、努力をして良いものを作らない限り、買い取ってさえもらえない。生産者にやさしいどころか、プロ意識をもって働いてもらうこのやり方は「厳しい」かもしれない。しかし本当に良いものを作ることができれば、フェアトレード団体やNPOでなくても、どの企業でも欲しがるだろう。「与えられる」フェアトレードから、生産者自らが「勝ち取る」フェアトレードへ、取り組みは進化し続けている。

現地では発酵の指導だけでなく、せん定や接ぎ木のアドバイスもおこなう

カカオはひとつの木に10～20個のラグビーボール大の実をつける

カカオの果実を木箱に入れ、バナナの葉で覆い発酵させる

カカオの実をわると白い果実がでてくる

農家の女性が豆に混じった枝やサイズの小さい豆を取り除く

京都で自家焙煎（ばいせん）したチョコレートは、インドネシア産木材を使った木箱に入れて販売される

フィールドで考える

退官寄稿

思い込みの転換と導いてくれる人びと

小林繁樹　民博 文化資源研究センター

柱を立ててから土台を造る?!

一九七一年以来、四五年ちかくになるフィールドワークを思い起こしてみると、若いころの思い込みと、それに気づかせてくれて、あらたな見方へと導いてくれた人びとのことが目に浮かんでくる。

わたしは、オセアニア地域の文化と歴史が知りたくて、この道を歩み始めた。そして、一九七三年のミクロネシア、ヤップ島でのフィールド体験が元となって、一九七六年と一九八二年に、当時の職場でヤップ島の家屋敷を、都合二回、建築する機会に恵まれた。一九八二年にはヤップ島で大工修行をしながら、家屋材を調達し、家屋の仮組みも試みた。

ヤップ島の住居は、長六角形の石積みの基壇上に建てられ、ヤシの葉で葺いた深く大きい屋根がつく切妻の掘っ立て小屋である。家の建て方は、当然、基壇を築き、それから柱を立てていくものと思っていた。しかし、実際はそうではなく、柱を立ててから、その周囲に石を積んで基壇としていくのである。曲がった自然木の柱をいく本も、しかも深く直線に立てるのは、なかなかむずかしい。それなら、柱を立ててからその外周りを石壁で築く方が、確かに理に適っている。

棟梁のワーヤンさんは、伝統的な技法を科学的に説明してくれようとする人だった。誠実で熱心な人で、仕事の手を休めてでも、問いかけにきちんと答えてくれた。ヤップ島にいるときは、朝七時から夜一〇時過ぎまで話をうかがい、質問を繰り返すという、じつに充実した日々を送った。

もう一度、出直そう

一九七四年には、パプアニューギニアのシアシ諸島で、遠洋航海をともなう贈物交換活動を調査することができた。一般的な事実を蓄積し、近隣での交換などに参加してきて、三度目の滞在となる一九八八年は、いよいよ遠洋航海に参加することをめざして出かけた。しかし、事前に何度も当人と約束をしたのに、四回あった機会とも、ついに一度も同行することはかなわなかった。後日、帰航した船の荷下ろしを見て、話しを聞くだけであった。理由がはっきりせず消沈するわたしに、寄宿先の主人も言い訳を口にするだけだった。

しかし、あるとき、彼の奥さんが、「相手が見知らぬ人を連れて行くと、交換がうまくいかなくなる心配があるからじゃないのかしら」とつぶやいた。島の人びとは親しくしてくれていたと思うのだが、それもはっきりしている訳ではないうえ、遠隔地の人びとは、わたしを誰一人として知らない。この地域では、「よそもの」が殺される事件も発生していたし、奥さんによると、「誰々さんからもらったタバコは、後でこっそり捨てて、決して吸わない」という。

この調査では、とくに家庭の事情や家計を知り、そこから意義を抽出することになる。わたしがまだまだ十分には信頼されていないのか、個々のケースに深く立ち入ってほしくなかったのかも知れない。人の気持ちを知ることは簡単にはいかないものである。奥さんの一言で、取組みの甘さを痛感した。

怒ると顔が大きくなるでしょ！

道具と文化の関係も、わたしの研究の関心事である。一九八五年には、チベット仏教の仏画を描く際、儀軌（規定）に基づき、朱でいく筋もの直線による補助線を引いた図像を粉本（お手本）とし、ものさしを使って構図を描くことを知った。しかも、ものさしの目盛りは、比例関係をごくおおまかに刻んだものであった。写生という画法に慣れていたわたしには、幾何学的描画法といえるこの描き方が、とても気になりだした。

そこで、一九九三年にネパールを訪れ、粉本の朱の線はまさしく計測線で、先にこれを引き、そこに墨で仏などを描くことを確認した。さらに、釈迦の身長はその顔の大きさの一〇倍分（一〇顔身）であり、明王のような忿怒形の身長は、その顔の大きさの七倍分（七顔身）などであるといった、諸仏の格に応じた表現形態がとられていることの重要性に、しだいに気づき始めた。

訪問直前に亡くなられた仏画師パギャルツェンさんのご子息であるプルバさんに、なぜ忿怒形は七顔身なのかと尋ねると、だって怒ると顔が大きくなるでしょ、と真顔で説いてくれた。なるほど、図法は画一的ではなく、心理的社会的影響もふくめた種類もあり、それらも数学的である。興味深い見方が、いっそう広がってきた。

フィールドワークにはいろいろな制約がつきまとう。しかし、そのなかで気づき、それまでの思い込みを転換させていくことは大切である。これからも、さらに謙虚で慎重にフィールドワークをし続けていきたい。

カヌー小屋の仮組作業（ミクロネシア、ヤップ島。1981 年）

交換では、まず挨拶をし、持参した品物をいい、あとから欲しいものをいう（ニューギニア、ウムボイ島。1988 年）

愛知県リトルワールドでの寺院復元のようす。ものさしを使って構図を決めるパギャルツェンさん（1985 年）

寺院の壁に描かれている忿怒形の合体仏（ネパール、ソル地方。1993 年）

統治性（ガヴァメンタリティ）とは、フランスの思想家ミシェル・フーコー（一九二六―八四）が一九七〇年代末につくった表現で、統治のあり方の意味。だが、ここでの統治という語の定義は少し独特だ。主権者による領土や人の支配、国家機構や組織の運営だけが統治の対象ではない。フーコーの統治性論は「自己と他者の統治」を扱う。

統治の語は、古代では操舵（そうだ）を指した。そこから転じ、あるものを方向づけし、導き、支配すること。船長が船を導くようにして、統治者は国家や都市を導く。しかしこうした発想は、こんにちのものとは異なる。古代人にとって導きの対象は国であり、現在のように人ではない。船の進路の決定と、船に乗っている人の誘導とは別の話だ。

では何が統治の対象を人にしたのか。羊飼いと羊の群れの比喩を用いるキリスト教だ。このモデルでイエスと人びと、聖職者と信徒は結びつき、救済が説かれる。一〇〇頭の群羊を昼夜問わず世話する牧者は、一頭の迷子のために、九九頭を残して探しに出る。マタイ伝に描かれるこうした牧者が、真の聖職者の姿なのだ。司牧（しぼく）たる聖職者は、全体と個への同時の配慮という困難な課題を担う。かくして統治の担い手、導き手は船長から羊飼いに交代し、その対象は、集団かつ個人としての人となる。西洋に独特な「司牧権力」の図式が、初期近代から現代の統治性を規定する。

この「人の統治」は「真理」と切り離せない。導かれる側は、

統治の根源

人間学のキーワード

統治性
Governmentality

箱田徹（はこだてつ）　立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員

己についてほんとうのことを語り、知り、認めることで統治されるからだ。キリスト教の告解（こっかい）（懺悔（ざんげ））は、導かれる側に真理を語るよう促し、初期精神医学は、暴力や珍妙な手法を用いて、現実という真理を「患者」に認めよと強いる。ここにもあらわれる、ほんとう＝真理を媒介とした導き導かれる関係、フーコーはこれを統治の構図とする。

近代国家の統治についても、市場を真理の場と見なして同じことがいえる。凶作で穀物価格が高騰すれば論争が起きる。食糧危機は、政権の崩壊や社会の混乱を招きかねないからだ。市場に介入して価格を公正な水準に導くべきか、放置して自然な水準への収束を待つべきか。介入と放任というふたつの立場は、価格が真の水準に至るべしと考える点で同じだ。だがその水準を決めるのが、市場に外的な価値基準か、市場に内在する調整機能かでは異なる。国家の自己統治は、市場と真理との関係性と切り離せない。

統治性論は、分析対象の規模にとらわれず、統治の構図を用いる。集団や個人間のミクロな権力関係も、国家や社会のマクロな権力関係も、自己と他者の統治という同じフレームで考えるのだ。興味深いことに、フーコーの議論は、西洋古代哲学と近代社会を往復し、現代資本主義論にもおよんだ。統治の問いが元の意味で扱われた時代に遡り、その変遷を現代まで追う統治性論では、現在の統治性の分析と、その反転可能性とが同時に模索されていたのである。

異聞逸聞

表現手段としてのラッピング車両

金田 純平（かねだ じゅんぺい）　民博 機関研究員

みんぱくの近くを運行する大阪モノレールには、車体表面の全体もしくは一部に広告が貼付されたラッピング車両が六編成運行している。広告などを印刷したフィルムで車体を覆ったもので、塗装に比べて低コストである。中央の写真は、阪急電車の車体カラーを模したラッピング車両である。京都への行楽には阪急京都線を利用しようという趣旨の広告である。

地域振興とゆるキャラ・萌えキャラ

ラッピング車両は、企業広告を中心に首都圏や関西など人口密集地で採用されてきたが、最近では地方自治体によるものが増えている。熊本県は観光キャンペーンとしてご当地キャラ「くまモン」を中心にしたラッピング広告を大阪（環状線）と東京（中央線快速）などで実施してきた。いっぽう地元では肥薩（ひさつ）おれんじ鉄道の「くまモン」の全面ラッピング車両を運行させ、さらに、大阪まで直通運転する九州新幹線にも「くまモン」ラッピングを施している。ラッピング車両を点と線で展開した地域振興キャンペーンである。

一見、阪急電車かと思ってしまう大阪モノレールのラッピング広告

ラッピング車両ではアニメのキャラターが採用されることも増えている。JR境線の「鬼太郎列車」といった有名なものから、鹿島臨海鉄道の「ガールズ&パンツァー列車」といった地元を舞台とする深夜アニメのものまで広まっている。これらは観光資源にもなっている。

広告を超えたラッピング車両

JR加古川線では、沿線の西脇（にしわき）市出身の画家・横尾忠則（よこおただのり）氏の作品によるラッピング車両が二〇一二年まで運行していた。また、二〇一三年の瀬戸内国際芸術祭では写真家の荒木経惟（あらきのぶよし）氏のデザインによる「アラーキー列車」が作品として出展され、実際に予讃線と土讃線で運行していた。ラッピング車両がアートの表現メディアになった好例である。

ラッピング車両は単なる広告媒体を超え、今や表現手段のひとつになった。景観を損ね地域アイデンティティを喪失させるとして非難されることもあるが、まずは人の目を楽しませるものとしての活用が望まれる。

制服の世界
THE UNIVERSE OF UNIFORMS
世界の制服

アメリカ先住民ホピが、農耕儀礼にともない開催する「ソーシャルダンス」。踊り手が身にまとうレガリアの制作は、伝統技能として今でも続けられている。

「季節の踊り」の盛装と織り手

伊藤敦規（いとう あつのり）　民博 研究戦略センター

レガリアを着たアキーマ・ホンユンプテワさん

ホピの「季節の踊り」

乾燥地に暮らす農耕民ホピが日常生活でもっとも関心を寄せているのは、トウモロコシの育成と雨乞い儀礼の執行、およびその準備であるといっても過言ではない。冬至から夏至までは、雨、雨雲の象徴であり祖霊の化身でもあるカチーナが登場する仮面儀礼が執りおこなわれる。一方、夏至から冬至には宗教結社の儀礼や、仮面を付けない男女による「ツェレ」とよばれるソーシャルダンスが開催される。

ソーシャルダンスを文字通り和訳すれば「社交ダンス」である。しかしホピのそれはイメージとは異なり、男性が女性をリードする、我々がよく知るタイプのものではない。農作物の育成を促す降雨・降雪や地中における保水の願い、動植物への祈り、近隣の先住民集団を礼賛する多様な「季節の踊り」のことである。男性が司（つかさど）るカチーナ儀礼と異なり、「季節の踊り」の演者には女性が含まれることから「少女のダンス」ともよばれる。主たる開催場所は現在でも保留地の村落だが、都市部の博物館などで祝祭的なパフォーマンスとして披露されることもある。そのため民博は、アメリカ展示場の新構築オープンを祝って、二〇一二年三月に研究公演「ホピの踊りと音楽」を開催した。

レガリアと織り手

踊り手が身にまとう衣装は、英語ではコスチュームではなくレガリアとよばれている。レガリアの意味は英語では、王位や官位を象徴する宝器、記章、礼装などを意味するが、ホピのあいだでは「季節の踊り」やカチーナ儀礼といった催事・祭事ごとに伝統に則（のっと）った組み合わせに従って身にまとう盛装のことを指す。いわば儀礼的な意味を有したユニフォームである。例えば、赤と緑の細長い帯（クウェワ）、白を基調とした幅の広い帯（マツァフングクウェワ）、男性なら腰巻き、女性なら肩にかける長方形状の織物（ピックナ）などがある。

これらの素材は、かつては綿であったが、スペイン人が「新大陸」に持ち込んだ羊が普及してから羊毛に代わった。近隣のナバホではブランケットやラグ（敷物）の織り手は女性が大多数を占めるものの、ホピで羊毛を紡ぎ、染色し、織りを手がけるのは、現在でも男性である。結婚を間近に控えた花婿のオジたちは、代わる代わる花嫁衣装を織ったものである。だが今日では、織り手の数が減少していることもあり、一人の織り手がひとつの作品を手がけることも多くなった。伝統文化の再興を目的として保留地内に創設された私立学校が、夏季集中授業として織りの受講生を募ることもあるが、後継者育成の問題が深刻となっている。

若手作家が紡ぐ未来

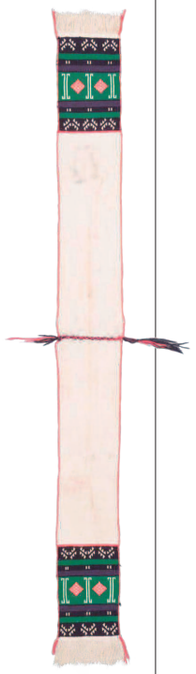
しかし今、ホピの内外から注目される若手のテキスタイル作家がいる。今年三四歳になるアキーマ・ホンユンプテワである。彼は、織りと絵画と木彫人形の制作で生計を立てるプロの作家である。幼少期から思春期までの二〇年近くを大都会で過ごした後に、自分のルーツを求めて保留地の村落に居を移した。ヒップホップ音楽の鑑賞やバスケットボールを好むところなど、他の米国市民やホピの若者と変わりはないが、広大な畑を一人で世話したり、高齢の宗教的指導者などに織りや木彫などの技術や意味についての教えを請うたり、髪の毛を降雨を象徴する結い方にするなど、伝統的な生活スタイルを志向し実践しているのだ。アキーマは民博の研究公演でもレガリアを着て踊り手をつとめてくれた。しかも他の演者のなかで唯一レガリアの制作に職業的に携わっていることもあり、米国の保留地から発送し忘れた毛糸（サクアッニ）が必要になると、急遽（きゅうきょ）楽屋で手慣れた様子でこしらえてくれたものである。

アキーマの自宅の織機

アキーマが織った「マツァフングクウェワ」

テキスタイル作家以外の職ではベーシストに憧れている

一人で畑の世話もおこなう。畑にいるときが一番幸せだというアキーマ



民博所蔵のホピの飾り帯 H0012295

2月

みんぱくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■ 14 時 30 分から 15 時 30 分
■ 2 月 23 日は展示観覧料が必要です。
※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんぱく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！
「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。
どんどん質問をおよせください。展示場でお待ちしております。

2日（日曜日）
話者：関雄二（国立民族学博物館 教授）
話題：南米アンデス文明の神殿で発見された
　　ジャガー人間石彫
会場：本館展示場（東南アジア横休憩所）

9日（日曜日）
話者：山中由里子（国立民族学博物館 准教授）
話題：＜驚異＞の文化史
　　――アジャーイブとミラビリアってなに？
会場：本館展示場（ナビひろば）

16日（日曜日）
話者：須藤健一（国立民族学博物館 館長）
話題：重宝されるタバと織物
会場：本館展示場（ナビひろば）

23日（日曜日）
話者：吉田ゆか子（国立民族学博物館 機関研究員）
話題：仮面が育む芸能――バリ島仮面舞踊劇トペンの世界
会場：本館展示場（ナビひろば）

1年間みんぱくに何度でも入館できる「みんぱくフリーパス（3,000円）」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引
◆みんぱくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引　など。
詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話06−6877−8893／平日9：00 ～ 17：00）

編集後記

「イメージの力」展には実行委員として、企画の段階からかかわらせていただいた。みんぱくの研究者、国立新美術館（新美）の学芸員、さらに館外の日本文化人類学会の有志の総勢13名で、どのような展覧会が日本文化人類学会50周年・みんぱく創設40周年を記念する事業としてふさわしいか、話し合いが繰り返された。さらに館員たちからも展示候補資料を募った。収蔵庫を館内外の実行委員で何度かまわり、「こんなものもあったのか」という意外な発見をした。

ちなみに、小誌の昨年8月号、「ハイブリッド」特集の表紙に使った「蛇口がついた木の手桶」は、この収蔵庫めぐりの際に偶然見つけた掘り出し物である。今回のようなコンセプトの展示がなければ、お寺での役目を終えた他の道具とともに博物館に寄贈されたあの手桶は、終の棲家（ついすみか）の収蔵棚でおそらくずっと眠り続けた。突然ひっぱり出され、写真を撮られ雑誌表紙を飾り、展示台で照明をあびるとは、当の手桶は夢想だにしなかったであろう。六本木のおしゃれな美術館でアートな人びとの視線にさらされながらも、飄然（ひょうぜん）と「イメージの力」を放つ手桶を、私はひそかに応援している。（山中由里子）

●表紙：ゾウの仮面「ムバップ・ムテン」　標本番号 H0205174
　地域：カメルーン　民族：バミレケ

次号の予告

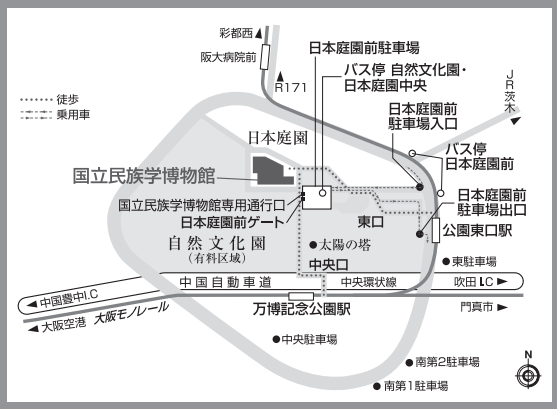
特集
夢か、うつつか

月刊みんぱく 2014 年 2 月号
第 38 巻第 2 号通巻第 437 号　2014 年 2 月 1 日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒 565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話　06-6876-2151

発行人　八杉佳穂
編集委員　山中由里子（編集長）　樫永真佐夫　久保正敏　庄司博史　菅瀬晶子　丹羽典生　野林厚志
編集アドバイザー　山内直樹
デザイン　宮谷一款
制作・協力　一般財団法人 千里文化財団
印刷　日本写真印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分。
●乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック
http://www.facebook.com/MINPAKU.official/
みんぱくツイッター
http://twitter.com/MINPAKUofficial